「戦争と平和！」
第３回

半分、大地の子

田中 京子

旧朝鮮生まれと言う事は、いつ頃からか定かで無いが知っていた。「日本國東京都京城府・・・・・・」と戸籍謄本に記載されている。父の仕事は測量師で、旧朝鮮総統府に勤めていた。オンドルがあり、お手伝いさんも居たらしいから落ち着いた生活だったらしい。住まいは、ソウルから三十分程の住宅街で、今も似た地名が残っている。

次兄が高齢になって、生まれた所を見て来たいと、戸籍謄本を頼りに、十数年前に行って来た。

平成26年に旧東京駅が復元されたが、此の京城駅は旧東京駅と同じ大正14年に竣工された。此れが駅舎と云うから驚きである。何と荘厳な建造物だろうか…。

両親と兄二人、生まれて間もない私との五人家族の引き揚げである。中国より日本に近かったのが無事に帰れた要因だったと思う。京城府での通貨は日本と同じだったので、オムツや子供の洋服に縫い付けて持って帰れたのが、引き揚げ後の生活の助けになったらしい。家族の中で戦前の話はほとんど聞いた記憶は無いが、引き揚げ船の中で、亡くなった子供の亡骸を海に流した話は鮮明に覚えている。

日本統治時代の京城府

父の実家、新潟県津南町・・・に身を寄せた。引き揚げて間もなく、小学生の長男を実家に預け、両親と次兄、私の４人で東京・国立に戻った。仕事が決まっていた事と、住む所が有った事で生活の基盤が出来たのは、引き揚げ者の中では幸せだったのだろうと思う。住まいは甲州街道沿いに在った土木事務所の二階の間借りだった。事務所と言っても、養蚕農家のあとで、二階で蚕を育てていた家で、そこでの記憶は、いつも寝ていて、お医者さんの往診を受けていた。きっと栄養失調だったのだろう。

3、4年後だろうか、国立に出来た今で言う復興住宅に移った。この頃の事は良く覚えている。長男も戻って来た。六畳と四畳半の和室・台所・トイレ。木造平屋建て二戸一の連棟住宅である。三つの連棟住宅が一つの井戸を囲んで使う。こうした形態が５ブロック程出来ていた。小学校も出来たが二部授業で、低学年は午前、高学年は午後。通学は下駄を履いて行った覚えがある。運動会は白足袋だった。栄養補給のためか肝油を配給され、これが嫌いで、ポケットに隠したりしていた。中央線で国立の隣が立川、そこには米軍基地があり、今でも残っている歓楽街があり、国立にも米兵や女性の姿が多く見られ、子供は保護者と一緒でないと立川に行ってはいけないと言われていた。西国立に朝鮮学校もあり、ここも近寄れない雰囲気が有った。

国立は文教地区と規制され遊興施設は禁止され、学園都市として今に至り、立川は商業施設を抱え繁栄している。私の名は京城府の京を取り、京子と付けられ、ケイコと呼ばれる。知らない人からはキョウコさんと呼ばれる。

十・百・千・万・億・兆・京・…無限大。　京は未来に広がる縁起のいい字らしい。

残りの日々を大事に楽しく過ごしたいと思っている。